

大江正章氏のご逝去を悼んで：有機農業学会との歩みと功績

澤登早苗¹

Heartfelt Gratitude and Praise for Mr. Ooe.

Sanae SAWANOBORI¹

¹Faculty of Human and Social Studies Keisen University



本学会理事大江正章さんが2020年12月15日にご逝去された。享年63歳だった。大江さんは1957年生まれ、早稲田大学政経学部卒業後、学陽書房の編集者を経て、1996年に出版社コモンズを創設し、環境・アジア・

農・食・自治などをテーマに250冊余（内50冊以上が有機農業関連）を出版し、2009年には梓会出版文化賞特別賞を受賞された。ジャーナリストとしても活躍されており、主著に「農業という仕事」（岩波ジュニア新書、2001年）、「地域の力」（岩波新書、2008年）、「地域に希望あり」（岩波新書、2015年）、「有機農業をはじめよう」（共著、コモンズ、2019年）、「場の力、人の力、農の力—たまごの会から暮らしの実験室へ」（共著、コモンズ、2015年）などがあり、2016年には「地域に希望あり」で農業ジャーナリスト賞を受賞されている。NGO活動にも力を注がれ、アジア太平洋資料センター（以下PARC）の共同代表、全国有機農業推進協議会・コミュニティスクールまちデザインの理事も務めておられた。

大江さんは昨年3月病気の発覚以降、闘病中も仕事を続けていた。PARCのオンライン講座では、5月29日の「パンデミックを生きる指針」でコメントを述べ、9月29日の「食と農を結ぶ—学校給食を有機農産物・無償に転換したソウル市」で講師を務めた。7月には山崎農業研究所所報「耕148号」に「有機農業学会の20年をふりかえって」を寄稿されている。

10月2日、大江さんは客員研究員であった農林水産政策研究所の研究会に出席した。大江さんの推薦で小口広太理事と私も参加し、再会を喜び合った。しかし、数日後「再入院」のメールが届いた。翌月発行された同研究所レビュー98号の巻頭言には笑顔の写真と共に「自給の重視と有機農業への転換」が掲載されている。

10月末、出来たばかりの「有機農業のチカラ」と大江

さんが長年通った八郷の田んぼのお米が届いた。先日、会った時に、書いたものを本にまとめている、と言っていたのを思い出した。12月5日、福島大会の全体セッション「コロナ禍と有機農業」に大江さんが参加することは叶わなかった。しかし、「有機農業のチカラ」を引用してまとめを行った。病床にいた大江さんが担当者として伝えたいと思っていることが、そこに書かれていると確信したからである。その10日後、悲しい知らせが届いた。

大江さんは、本学会にとってなくてはならない人であった。2012年から理事を務められ、近年は大会等で座長を任されることが多かったのでその印象が強いかもしれない。しかし、学会設立当初から2008年まで学会誌「有機農業研究年報」（全8巻）の編集・刊行に携わっていたのも、20周年記念の「有機農業大全」の刊行のために命を削る思いで尽力下さったのも大江さんである。2006年に有機農業推進法が成立し、有機農業は今では市民権を得るようになった。しかし、その背景には、わかりやすいことばで大切なことを伝え続けてきた出版人&ジャーナリスト大江正章の献身的な働きと出版社コモンズの存在があったことを覚えておいて欲しい。

大江さんが買ってきたスタイルは、有機農業研究年報8巻に記されている。「本年報は他の学会誌には見られない編集方針をとってきました。それは…『学会誌』としての性格と『啓蒙書』としての性格を併せもつというものです。専門性だけに閉じこもった著書や学術誌に対して批判的である私が本年報の編集・発行を引き受けたのは、この考えに共感したからです。」「常に特集においては、広く食・農・いのち・環境に関心を持つ方々を読者として想定してきました。「有機農業を研究する」も、少しでもわかりやすい記述を心掛けたつもりです。」

大江さん、今まで本当にありがとうございました。大江さんの想いを、コロナ禍を生きる知恵としての有機農業のチカラを、そして有機農業学会が果たすべき使命を次世代へ継承していきます。ご冥福をお祈りします。

¹ 恵泉女学園大学